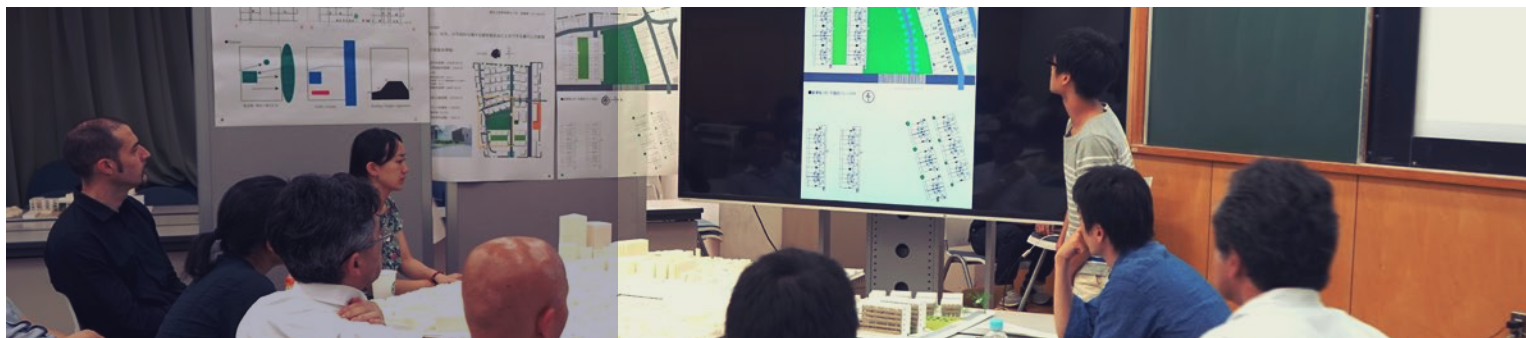


Urban Design Lab. Magazine

2014.07.29 vol. 219



スタジオ課題を終えて

LOOKING BACK ON THE STUDIOS

演習振り返り座談会 学部3年地区開発計画演習 p.2

植物と都市 2014年 建築学専攻 設計製図第一 千葉スタジオ p.4

阪神淡路大震災のリデザイン 復興デザインスタジオ p.6

東京大学

工学部都市工学科／

工学系研究科都市工学専攻

都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎

編集委員：道喜 開視 原 由希子 柄澤 薫冬

柴田 純花 中村 奈菜美 益邑 明伸



演習振り返り座談会 学部3年地区開発計画演習

A Round Table Talk Reflecting on the B3 District Development Planning Studio

修士から専門を変えて都市デザイン研究室にきた今川・高橋・中村がB3の地区開発計画演習を履修しました。その振り返りとして演習TAであったM2高梨・道喜、M1柄澤との座談会を行いました。PJ等との兼ね合いで満足に手を動かすことが出来ず、反省も多く残る少し低めの自己採点となったようです。

*

一対象敷地

対象地は東京都荒川区荒川二丁目。町屋駅の南東300mに位置する3haの土地への開発計画を立案する。対象敷地のすぐ東を都電荒川線が通り、その先の高台には荒川自然公園がある。西側は下町の木造密集市街地が広がっている。

*

一自己採点

柄澤 このような演習をとって実際どうだった？

今川 こまでやる授業があるという驚き。徹夜してまでやる授業はなかった。でも受ける前からそれは聞いていて、ワクワクしていた。終わった後は、絶望感。

高梨 正直終わった後、自己採点すると

したら？

高橋 35点。赤点ギリギリで。

一同 35点って赤点でしょー

高橋 35点は赤点じゃないっすよ...！終わった後直感的にやばいとは思ったが、その後、自分のパネル見て反省点がどんどん出てくる。考えていなかったことではなく、頭でわかっていたことを落とせなかった。

高梨 先生につっこまれたのは？

高橋 誰がどういう行為をここでののか？ということ。聞かれてパッとイメージができなかった。実際に自分がやってみて意識しないといけないということが改めてわかった。

高梨 ちょっと広場のツメが雑だったよね、とか（笑）。

話を戻すと、今川は何点？

今川 乗り切ったというそれだけの勢いで60点。それに3点加えて63点。最後まで迷っていた部分をほんの少しではあるが形を変えたことが自分にとっては良かった。ずらしてうまく組み合わせるような形にした。最初はすっきりしている方が良いのではと考えていたが、別に

路地性というのはそういうことにこだわらなくても良いのではないかと。

高梨 最後の最後に1:200で変えた経験ってのはすごい貴重。それが1週間前にできるといいんだけどね（笑）。

今川 全体的に中途半端だった。忙しさを言い訳にしたくないが、手を動かす時間は別にしても思考はもう少しちょこちょこできたのでは。中村さんは？

中村 終わってないので言うことはできない。若さが必要！M1は歳とり過ぎ。

一それぞれ大学では違う専門

柄澤 卒論で取り組んでいた防火建築というような論文ベースの考え方は、具体的に提案となると違った？

高橋 論文は頭。実際手を動かすとなるとうまくいかなかった。

高梨 逆に論文で入ってきた身としては、他のことが足りないよね、というのはある？

道喜 例えば復興デザインのスタジオだと、前に座学があって、スタジオがある。

高橋 ああ。自分で考えて、人に聞いて覚えるのも必要だけど、最低限のところ

M1: 今川高嶺 うえる下町

人の手で作り出されるものが見える町にしたい。

人の営みにより絶えず町が更新されていく、そんな集合住宅を作りました。

大事にしたのは路地によるしみだす生活感と、畑や個人の庭スペースといった土の空間の確保です。また、西側の下町的な低層建築物の通りと、そこにある商店をそのまま活かし、連続的になるように設計しました。

詳細部分では、個々の建築物で階段状に庭を配置していき、多少凹凸のある形にすることで、路地感と庭スペース、土の余白部分の確保の両立を図りました。



M1: 高橋瞬 近くのみどり 遠くのみどり

近代以降 NIMBY の集積が目立った対象地区だが、荒川自然公園及び地区西側の木造密集地域に残る緑は貴重な地域資源の 1 つである。この資源を活かした計画作りを目指した。

まず地上から約 6m の高さにある自然公園への眺望景観の創出を図っている。この結果地区内の各オープンスペースからは緑豊かな公園がのぞめる。

次に公園へのアクセス性を高めるべく公園に至る新たな街路を設けた。

また西側では木密のスケールを活かした住居の設計を行っている。



M1: 中村奈菜美 うた庭テラス

町屋は、迷惑施設の集中など、歴史的に負のイメージがあります。私は、この敷地から新しいイメージを発信したいと思いました。荒川は、ウィーンと姉妹都市であり、児童合唱団の交流があります。

うた庭テラスでは、住棟にガラス張りの「うたテラス（音楽練習室）」を併設します。

散歩していると誰かの演奏する音楽がきこえ、うたテラスの窓を開けて庭に座れば野外コンサートホールができる。そんな音楽の街・町屋を発信したいです。



はミニレクチャーなどがあれば良かったかも。カッターの使い方とか。

道喜 そこは自分で聞いてほしかった。(笑)。でも 3 年に混じって聞くのは憚られるのかもしれないけど。

今川 あとは、アイデアの内容について深く議論できたらおもしろかったかもしれない。アイデアが根本的に良いかどうかまで戦えたら。

柄澤 建設系とは違う分野から来ると違いはどう？

中村 4 月からのまち歩きで、石神井公園での小泉先生のレクチャー、10m までの高さ制限とか頭で決めてしまうから、ズレてしまう。頭の中のイメージと形がやっぱり違っていて、そこを認識しておく必要がある。自分は行政官になりたかったので、文系の行政官が技官を使うという目線になると、ズレがあることを認識して、その時に現場の声に耳を傾けなきゃいけないんだなということを思った。むしろ、ここの人たちはスペシャリストとしての能力を磨けばいいけれども、ジェネラリストとしてはこのことを知っておくべき。使うと言うと法律職の

人が偉いというようなイメージがあるがそうではなくて、ちゃんと現場の意向をくむことが大事なんだな。

今川 確かに実際に設計してみて法律は大きいと思った。

一既存の文脈の活かし方

高橋 例えば、既存市街地の更新とかが都市工の演習であったりするの？

高梨 黒瀬先生は本当は敷地をもう少し小さくして密集市街地の建て替えシステムをやりたいかった。しかし、難しすぎると却下された。

柄澤 でも年々難しくはなってきた。より敷地の周辺との繋がりを考えなくてはならないようになってきている。

高橋 東側（公園側）の眺望を意識していたが、西側（木造密集市街地側）を意識し過ぎてしまった。

柄澤 西との繋がりはどう解こうと？

今川 最初に見学した段階から、いいなと思いながら歩いていて、西側を活かそうと考えていた。

高梨 頭のなかコミュニティ、コミュニティしてるな（笑）。

一グループ課題の地区分析がどう設計に生きたか

柄澤 地区分析は結局個人でやったのしか身に付かないと思う。他人のやったこととして受け流してしまう。地区分析でやったテーマは設計に結びついた？

今川 歴史班は活かしていたが、自分のいた人口立地班は基礎情報だと思う。設計は、僕の心の底から出したもの（笑）。

中村 私は交通班だが、交通にはフォーカスしなくて、歴史班の話にフォーカスしていた。地区分析で何を不得きやいけなかったかがわからなかった。人口とかに代表される正確な情報なのか？自分のストーリーみたいなのなのか？

柄澤 確かに歴史のようにストーリーを組み立てていくものと人口や交通のような基礎情報がある。単にひとつの地区分析課題としてしまうのではなく 2 フェーズに分けてもよかったかもしれないね。

高梨 最後に道喜さんの自己採点は？

道喜 100 点。(TA 作成の周辺模型で) 十分働いた！

一同 間違いない！（笑）。 ■

(編集: M1 柄澤)

■ 課題説明

都市には、多くの植物が植えられている。それらは、樹種や植えられている位置・数等、設計者の何かしらの意図によってその場所に植えられる。そこでこの課題では、都市における植物のあり方について、自分なりの解釈をもって設計を行うことを目的とする。都市のランドスケープがどうあるべきか、建築とランドスケープ双方の観点から考察する。計画地や規模・プログラムはすべて自由に設定することができる。中間発表までの前半は、リサーチを中心に行い、後半は、実際に設計を進める。

植物と都市 2014 年 建築学専攻 設計製図第一 千葉スタジオ

Vegetation and Cities - 2014 Dept. of Architecture Design Studio 1 (Prof. Chiba)

M1 森川と李が建築学専攻開講の設計製図第一を受講し、森川が千葉スタジオの優秀作品に選ばれました。李から森川へインタビューを行いつつ、都市工からの受講者の少ない建築スタジオの実態に迫ります。

*

李 まずは最終講評会までの長い戦いを乗り切った感想を聞かせて下さい。

森川 率直に、想像以上に疲れました…。

李 研究室泊まりの日々、お疲れさまでした！スタジオ期間中はずっと走りっぱなしだったかと思いますが、作品のどこに特に力を入れていましたか。

森川 いやいや、お互いお疲れ様でした。模型は、質感にこだわったつもりではあるかな。道路表現は、スチペにジェッソとサンディを混ぜたりして。木は、どうするかずっと悩んでた…。

あと、リサーチからコンセプト・プログラムを練る練習をほとんどやってこなかったの、そこは意識してやろうとしてた。でも、全然出来なかったけど！

李 木悩んでたね。冗談で話していたら

本当にパセリを買ってくるとは思いませんでした、さすが！

森川 パセリ懐かしい！夜に買って、朝はもう使えないくらいしなしなになっていたという（笑）。

李 植物を扱うような今までやったことのなかったであろうテーマで、ギャップを感じたことや、逆にバックグラウンドを活かした部分はありましたか。もしくは、この課題から視点が変わったとか学んだとかでもいいので教えて下さい。

森川 ギャップが分からないけど、難しかったのは植物と都市という広すぎる設定をどう扱っていいのかただただ分からなかった。二人で結構悩んでたよね、このテーマ。

あと、この課題を通して、植物って設計する上で重要なんだなって改めて実感したかな。最近、実際に街中歩いている時に、植物ばかり見ちゃうんだよね。

李 たしかに広すぎる！！テーマもみんなばらばらで面白かったよね。千葉先生、成瀬先生、三谷先生の3名の先生方からエスキスしてもらえて、それぞれ視点や意見が違うこともあったけれど、各先生

方から受けたエスキスで印象に残っていることがあれば教えてください。

森川 千葉先生にとりあえず手を動かすことを再三再四言われ、でも持っていくと、提出ぎりぎりでも、もっといいものができるってざっくりと言われて。終わりが見えなかったけど、どこまでも突き詰めることは大事だと思ったね。あと、深夜のテーマソングは、Mr.Childrenの終わりなき旅だった（笑）。

李 終わりなき旅！ぴったりだね。

最後に、このスタジオをとって、良かったと思うことや今後活かしていきたいこと等を聞かせて下さい。

森川 植物と都市っていうテーマで取り組んで、できる限り広域的に設計地のあり方を考えようとしたことは、良かった。結果、あまり生かされてないのだけど。あと、建築の学部生のみなさんが、すごく優秀で、めげずに（笑）。課題に真っ直ぐに取り組む姿勢は勉強になった！

最後に、植物と人との空間のつくり方（シークエンス的な面からも）が、あまり考えられていなかったから、そこは課題ですね。

（編集：M1 柄澤）



M1: 李美沙 銀座夜小路計画

Misa LEE

Ginza Night Alley Plan



都市の中の植物を意識して見てみると、コンクリートで覆われた大地の隙間から窮屈そうに顔を出していたり、規制緩和の“アメ”として利用されていたりするように、特に都心は、植物の入る

余地のないくらい構造物で埋め尽くされていること、人工的に点々と後付けのように植樹されていること等の現状があります。

この作品は、このような現状を打破す

べく、植物にとっては生息しやすく、人にとっては自動車に邪魔をされずに回遊しやすい空間を都市の中に再編しようという主旨のもとで計画しました。

対象地の銀座は、道は煉瓦で舗装されていて、建築物同士の間には固有の路地があり、あらゆる年代の人々にぎわっています。最近では、屋上緑化が盛んに行われ、高さ制限の緩和により高層建築物が増えてきており、ルーフスケープに変化が現れ始めています。こうした特性から、点在する屋上緑化をつなげ、新たに植樹をしながら、銀座に屋上散歩道の提案をしました。また、屋上にはビアガーデンやテラス・バー等として利用される特徴があることを活かし、夜に咲く植物を集め、それぞれ異なる生息環境であることを考慮に入れつつ、夜に特化した植物園としての機能も考えました。



M1: 森川千裕 植物と暮らす

Chihiro MORIKAWA

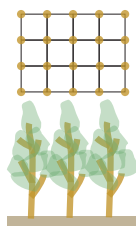
Live with Plants

東日本大震災時に液状化被害が甚大であった浦安市では、公園緑地などの木の根が深く張っているところでは被害がほぼ見られなかったという調査結果が残されています。そこで、「液状化と植物」をコンセプトに対象敷地を浦安市入船地区とし、設計を行いました。

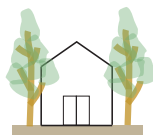
入船地区の現況から、プログラムは地域の核となる公共施設・防災倉庫・子供の遊び場・休憩スペースとなる茶室などを入れ込み、平常時はコミュニティ施設として、災害時には防災拠点として機能するようにしました。

設計のダイアグラムは、図の通りです。ここに植える樹種としては、直根性で深根性のタブノキ・カシ類を考えています。設計したプランは、海を臨めることができ、木々の中を階段で上っていくプランと、地区の中心に位置し、スロープで徐々に上っていくプランになります。

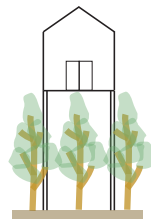
構造は、メッシュ材で床を支えることにより荷重を分散させることで床スラブを薄く、支える柱を少なくしています。



敷地に樹木をグリッド上に植える
→根が深く張り、液状化を抑える
効果が期待される



公民館などコミュニティ施設を
建てる



木々の根が建物の下も伸びることが
できるようにするため、施設を上
に持ち上げる



スロープ・階段でつなげる
→災害時の高齢化対策として、高齢者も
日頃から健康を意識できるプログラム
とする



阪神淡路大震災のリデザイン 復興デザインスタジオ

Re-Design from the Great Hanshin Awaji Earthquake

今年から開講されることとなった「復興デザインスタジオ」と「復興デザイン学」。これらは、「減災・復興実践学」復興デザインコースの一環で、所定の単位を満たすと修了証が発行されます。新たな取り組みの説明を窪田特任教授に伺い、その中心に位置する復興デザインスタジオでの各班の成果をまとめます。

窪田亜矢特任教授

復興デザインとは

—自分にとっての復興デザイン

工学の学徒は、社会に役立つ技術確立したいと願っています。自分もその一人と思っています。しかし状況はそれほど単純であるはずもなく、現代の技術が体系化されると特定の一面では効率的に益を生み出すようになって、別の一面では何かが失われていく事態があることに気づきます。たとえば、膨大になったリスクとその隠蔽によって、社会におけ

る他者への信頼や、意のままにならない状況を想像する能力が喪失されていったのではないのでしょうか。こうした事態は、明確に害と位置づけるべきものですが、自ずと生じているのではなく、誰かが生み出しているのです。益と害についてのみならず、加害と被害という相対する行為も空間的・時間的に離れた場所で生じるという特徴があるように思えます。

そういうことをぼんやりとしか思わずに40歳代半ばまで生きてきて直面したのが、東日本大震災でした。それは、加害者としての自分、時間の有限性、人間の孤独に向き合うことを意味しました。こう言葉に書いてみると後ろ向きな感じを与えるかも知れませんが、そういうことではありません。復興デザインは、思索の継続を要求します。それが救いになります。ハイデッガーを正確に理解できているとは思っていませんが、『技術への問い』の楽観的な最後の一節を引いておきたいと思います。

「われわれが危険に近づけば近づくほど、それだけ救うものへの道は明るく光りはじめ、それだけいっそうわれわれはよく問うようになる。」

—専攻横断型教育プログラム「減災・復興実践学」復興デザインコース

そのような道としてデザインしたのが「復興デザインコース」です。最も重要な部分は「復興デザインスタジオ」と「復興デザイン学」です。プログラムの詳細は、「復興デザイン研究体」のウェブサイトに掲載する予定ですが、是非関わ

てください。

—「復興デザイン研究体」と「地域デザイン研究室」

建設系三専攻を中心とする社会連携講座「復興デザイン研究体」は、こうした教育プログラムを重視しつつ、分野を越えた総合性を備えた復興デザインを追究し、現場での実践的研究も行います。そのためには、豊かに暮らしたい／暮らし続けたいという願望との多面的な価値の統合も追究せねばなりません。それが「地域デザイン研究室」の役割だと捉えています。各地域についての固有な理解を積み重ねつつ、地域／地域デザイン／地域デザイン研究を普遍的に捉えます。

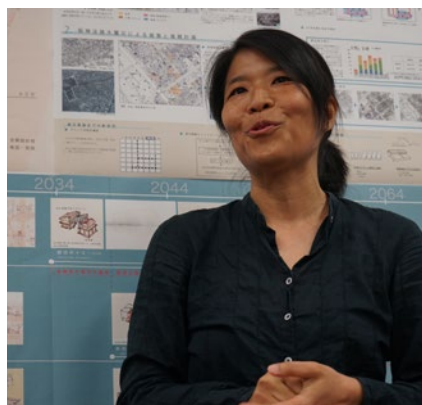
*

—課題内容

「阪神・淡路大震災の復興事業をリデザインする」

3.11が起き、首都直下型地震が予想される今日、震災を定量的に検証し、復興事業を評価することが必要です。震災から20年が経ち、まとまった検証が可能な阪神・淡路大震災を分析対象とします。被災前／災害時／復興事業という三時点における空間の変容過程を把握し、神戸の現状に対してレジリエンスを高める方向性を提示します。建設系3専攻を混ぜて構成された3チームそれぞれが、インフラ(1班)/建築(2班)/都市(3班)のテーマを持ち、神戸に対して3ヶ月向き合った成果を次ページ以降に掲載しました。

(編集:M1 柄澤)



各班成果物

1 班

Hub-Terminal Housing

都市：中島・羽野 建築：前川・矢吹 社基：池永・矢野



▲ Aさん(単身高齢者 etc)
の「第2公営」立地圏域

1 班 は「Hub-Terminal Housing」として、借上公営住宅を活用した復興公営住宅供給政策を提案しました。

阪神淡路大震災から導入された借上げ公営住宅(民間の土地を借りる公営住宅)は利便性の高い市街地に立地でき早期復興に貢献しましたが、現在、借上げの期限である20年が迫る中で退去に伴う住み替えが進まないことが問題になっています。

これを踏まえ私たちは、市街地における早期の復興を促進するため借上げ公営住宅を「ハブ」として積極的に取り入れること、そしてその間に市街地に、住み替えやすい立地・機能を備えたターミナルとなる「第2公営」を建設・提供することを提

案しました。特に「第2公営」は住み替えを意識し、個人属性に応じて住み替え先として望まれる立地や機能を考慮しました。

この提案は、復興の促進、市街地での用地取得の時間を作ることで、そして郊外既存公営の建物更新を抑えた縮退にも貢献できると考えます。

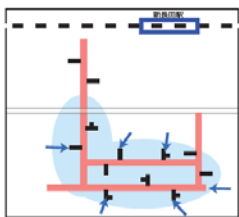
さらに、借上復興公営住宅であるキャナルタウンウエストを「ハブ」とした場合のケーススタディを行いました。入居者の属性、借上げ期限に伴う住み替え状況や周辺土地利用の変遷の分析を基に、「単身男性高齢者」「〇〇病院に通院中」等の属性を想定し、属性ごとに福祉施設や病院、買い物先等の圏域の重なる場所とそこにある空き地から、望まれる「第2公営」の立地を提案しました。積極的な施策内容までは踏み込みませんでした。単線型・郊外大量供給の復興公営住宅供給制度の問題点に対する一つの解決案を形にできたのではないかと思います。

(執筆：M1 羽野)

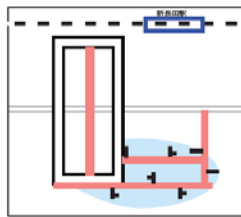
2 班

新長田劇場

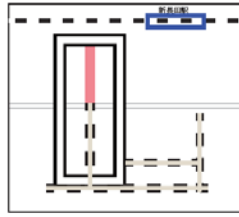
都市：柴田・福永 建築：小川・安田 社基：佐井



長田南地区の中心を担っていた商店街エリア



商店街の新たな一部として大きなボリュームが造られた。



周辺部となった旧来の商店街からにぎわいが撤退し、駅前の一部店舗に集約された。

新長田では復興再開発事業が地域を分断し、また現在空きテナントや管理組運営問題を生み出している。20年経った今でも復興計画の影響が強く残っているこの地区で、時間軸を通して振り返り、この先の将来像を考えることが必要だと考えました。

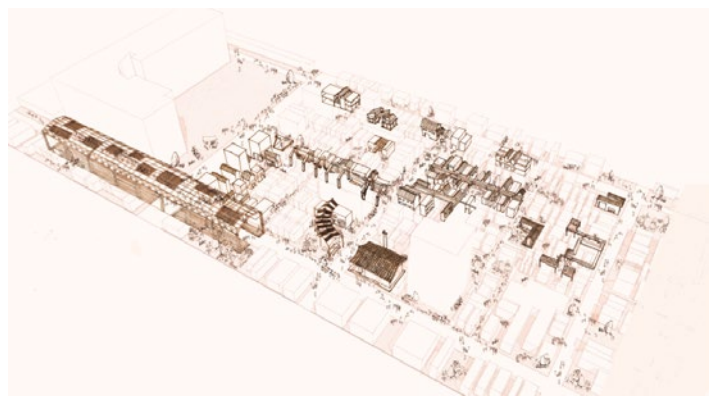
～まちなかの小さな操作の重なりから、人々の大きな重なりを生む～

1910年代の耕地整理事業から地区の盛衰と街の施設や街路の関係を見ていく中で、複数の商店街が街の中心で囲み型に配置され、人々の生活を共有する場が

存在していたことが、多様な人々を包容するかつての下町らしさを生み出していたと考えました。また商業の衰退や防災といった問題を地域全体で共有し、分断された地区を跨いで解決しなければならないと考えました。

～小さな住商工の風景が紡ぐこれからの長田像とまちの形～

元々この地区の生業であるモノ作りをきっかけに新たな人々を誘致し、DIYを通して人々が再開発地区の空きテナント、木造密集地域の空き家を自らの手で再利用していくなかで、新たな繋がりを重ねまちに貢献する機会を徐々に増やしていくというスキームを考えました。問題意識やコンセプトでは都市工学や社会基盤にみられるスケールで解きながら、未来のイメージを見せるために模型やパーススケッチにも力を入れることを意識した提案になりました。



(執筆：M1 福永)

「公共空間は誰のものか。公共空間はどうしたらいい？」

神戸訪問の感想文をチーム内で共有した。建築学科の彼女は公園に自主的に仮設住宅を建てて生活していた人々を行政が追い出すことに、理解を示しつつ疑問を投げかけていた。

見方を変えると、これはどのように良質な公共空間を生み出し活用していくかという都市デザインの問いだった。「都市」という大きなテーマに苦しんでいたが、彼女の一言から都市の側面にフォーカスできた瞬間だった。

災害は土地利用に劇的な変化をもたらし、場合によっては大きく都市の形を変えていく。その変化の過程は複雑で、大規模な災害からの復興過程

では A から B へ移り変わる間に「空間の時限的利用」が実は必要なのだ。そのため空間を確保していくことは復興において重要だと考えた。

神戸の実例からどれくらいの「空間の時限的利用」がどのように分布し、どのような評価が下されていたかを時系列で整理した。その上で「空間の時限的利用」を適切に行いながら、住み慣れた土地で

生活を続けつつ復興していく提案を行った。「空間の時限的な利用」の必要性は用途、量ともに時間が経つにつれて変化していく。複数の利用を一つの土地でこなすよう、時間経過に伴いダイナミックに土地利用を変化させていくことで、郊外へ拡大せずに復興を成し遂げていくことができると思った。

社基や建築の学生、先生方や TA の方と密度の濃い議論ができた貴重な数か月だった。

(執筆：M1 益邑)

▼ダイナミックな土地利用を適用した神戸の X 年後の姿



M1: 柄澤薫冬

スタジオを受講して

同じ建設系 3 専攻にもかかわらず、建築・社基・都市工では着眼点やバックグラウンドが全く異なり、グループ内での議論の進みが読めない分、面白くもあり苦労も多かった。現地調査の代わりに google ストリートビューでは何故ダメなのか説明したことは今でも記憶に残っている。ストリートビューでは確認することしかできず新たな発見はしにくいと答えたが、現地見学に行き、ようやくその重要さをわかってもらった。

課題内容としては、「誰のための復興なのか」「行政はどこまで対応するべきか」といった根本的な問題は答えが出るものではないと今でも思っているが、答えが出ないなりに真面目に議論する時間がとれたことがスタジオで自分が学んだ一番大きいものだと思う。例えば、仮設住宅建設の話は、住民視点ではできるだけ元々住んでいたところの近くに住みたいと思う一方、行政視点では、市街地の復興を迅速に進ませるためにできるだけ郊外に建設したいと考えており、基本的な対立に使える土地の制限や権利関係なども関係して結論が出せない。自分では「まあそうだよね」と思っていた範囲であったので、一度きちんと議論できたこの経験を大切にしたい。

Information

7 月のウェブ記事

さわらぼ、始めました。
地域と西村先生、西村幸夫町並み塾 in 三国
オランダ便り
星輝祭潜入、さわらぼと連動企画開催！
清水の温かさに触れた 2 日間。
アトリエワンとゆく神戸学ツアー！！
あの小藤田正夫さん、熱弁！
大槌プロジェクトのこれまで
Bangkok × Tokyo International Workshop 2014 キックオフ！
都市デザイン・地域デザイン研究室合同、学部 4 年生歓迎会開催！

是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

8 月の予定

7 月 30 日～8 月 3 日	Lumbini ISSC
8 月 1 日～10 日	Chulalongkorn Uni WS
8 月 7 日～11 日	三国現地調査 +WS
8 月 14 日～17 日	大槌現地調査
8 月 21 日	浦安現地調査
8 月 30 日	三国「帯のまち流し」

✧ 編集後記

柄澤 薫冬

二転三転申し訳ないですが、月一回の発行を尊重し、7 月号発行します。しかしレイアウトを変えると意気込んでいたものの通常の編集業務すら完璧には程遠く... 先達の偉大さを実感しました。今号も冊子形式ですが、ぜひご意見ご感想頂けると幸いです。久しぶりに涼しさの漂う夏空のもと、初編集とジュリーが終わった開放感そのままにどこかに飛び立ちたい気分ですが、とりあえずのビールと布団が待ちきれないです。